

演題名：内視鏡下椎間板摘出術(MED)における硬膜損傷の特徴

所属：稲波脊椎・関節病院¹⁾、岩井整形外科内科病院²⁾、自治医科大学整形外科³⁾
井上泰一（いのうえ ひろかず）¹⁾、湯澤洋平¹⁾、金子剛士¹⁾、林明彦²⁾、近藤幹大²⁾、古閑比佐志²⁾、高野裕一²⁾、竹下克志³⁾、稲波弘彦¹⁾

抄録：

【はじめに】内視鏡下椎間板摘出術(MED)は従来法に比べ低侵襲で、早期社会復帰が可能である。内視鏡による硬膜損傷は、損傷器具、損傷形態についてまとまった報告はほとんどない。今回、後ろ向きに手術動画を確認し、損傷状況について検討した。

【方法】岩井整形外科内科病院で2014年1月から12月までに行われたMEDを対象とし、損傷器具、損傷部位、修復方法について検討した。

【結果】硬膜損傷は640例中25例(3.9%)存在した。損傷器具は鋭匙8例、ケリソン6例、ノミ4例、ヘルニア鉗子2例、ペンフィールド2例、吸引管2例、不明1例であった。損傷部位は同側16例、対側6例であった。修復方法は、硬膜縫合を行ったもの7例、ネオベール+フィブリングルー11例、フィブリングルーのみ7例であった。

【考察】吸引管やペンフィールドでも損傷した例があり、硬膜に触れる器具については細心の注意を払う必要がある。